

研究論文

## 生活綴方教育前史の検討

—— 芦田恵之助の「随意選題」における「自己」 ——

飯田和明\*

A Study of Events connected with SEIKATSU TSUZURIKATA KYOUIKU  
("Composition Based on Daily Life"):  
The Concept of "Self" in ZUISENDAI ("Free Selection of A Theme  
on Writing Education") by ASHIDA ENOSUKE

Kazuaki IIDA

### 1. はじめに

戦前期の日本に生起し、その興隆を見た生活綴方教育を、戦後にも引き継ぐ上で大きな役割を果たした日本作文の会編集による『生活綴方事典』は、次の文章で始められている。

日本の明治以来の「君のため・国のため」の教育が、「自己のため・国民のため」の教育について自覚しはじめるまでには、長い年月を要しました。そして、このような自覚のひとつは、大正になってからの随意選題の綴方に芽ばえ、「赤い鳥」の綴方をへて、生活綴方運動によってしだいに育ってきたのだということが出来ます。それまでは、多く他人のコトバで、他人の思想・感情をつづらせていたのが、生活綴方運動では自己のコトバで、自己の思想・感情を綴らせるようになりました。このことが、子どもたちの人間性の解放、自己確立とそれをいっそう社会的なものにしていくことに役だち、またコトバを正しく身につけていくことに貢献するようになったのです。(日本作文の会「はじめのことば」1958 p.1)

本事典は、「昨年は、生活綴方運動の先駆者のひとりである小砂丘忠義没後二十一年で、わが会ではこれを記念するために、この書の出版を企画しました。」(同 p.2)

---

\*筑波大学附属中学校

とあるように、小砂丘忠義記念事業の意味合いを持ち、「この書の執筆は、日本作文の会の顧問・会員および生活綴方運動の共感をよせる学者・芸術家が分担しました。生活綴方についての根本的な理論の探究がまだ十分になされていない今日では、それぞれの広範な見解から意見をのべ、幅のある統一を求めることが大切だと考えましたので、この書ではこのような立場をとりました。」(同 p. 2) とあることから、「はじめのことば」は、その執筆者名を「日本作文の会」とし、生活綴方教育生成の重要な契機となった雑誌『綴方生活』に同人として小砂丘と同時代に参加していた今井誉次郎を編集代表とする十一名の編集委員の合意を経て掲載されたものであると考えられる。編集委員には、小川太郎、国分一太郎、寒川道夫、滑川道夫、波多野完治らが名を連ね、本事典が、戦前から戦争期を経て戦後に至る時期の生活綴方教育に深く関与した者たちが集った「書」であり、その「はじめのことば」は、「それぞれの広範な見解から意見をのべ」た上での「幅のある統一を求めた」、概括的でありながらも一般読者向けに示された紹介文を超えて、当時における一定の定見を含む文章として扱うことができる内容を持っていると考えることができる<sup>1)</sup>。

ここには生活綴方について考察していく上で、二つの重要な内容が示されている。

一つは、「君のため・国のため」の教育が、「自己のため・国民のため」の教育について自覚しはじめる」に際して、「随意選題の綴方」に端を発する教育が、「赤い鳥」の綴方を経て、「生活綴方」につながっていったという捉え方がされていることである。そこでは、それぞれの綴方教育における主要な人物として、芦田恵之助(随意選題)・鈴木三重吉(赤い鳥)、小砂丘忠義(生活綴方)の三名が、つながりを為すことになる。

もう一点は、そういった教育が発展していく為の基点として「自己」概念に関わる言説が用いられていることである。「自己」をめぐる教育の自覚こそが、長く「他人のコトバ」「他人の思想・感情」に支配されていた作文・綴方教育を、「自己のコトバ」「自己の思想・感情」にとって換わるものたらしめ、ひいては「子どもたちの人間性の解放」「自己確立」へとつながっていった、とされているわけである。

この二点の重なるところ、生活綴方の源流に、「随意選題」の主導者、芦田恵之助が位置することになる。

「はじめのことば」の前の頁には、巻頭写真として「今は亡き生活綴方の先駆者たち」が掲載されているが、そこで大きく扱われているのが「随意選題の綴方」の唱道者である芦田恵之助と、「生活綴方運動」の始祖と言われる小砂丘忠義である。それは、本書の成立がその根幹を多くこの二人の仕事に負っており、本事典を用いた将来の生活綴方教育研究においても、両者の検討が重要になることを示唆するものともなっている。筆者は、小砂丘忠義の綴方教育が生活綴方教育の生成において果たした役割を検討し、従来の戦後の生活綴方教育研究では看過されている部面を指摘してきた<sup>93</sup>。そこでは、小砂丘における「自己」概念の検討が重要な役割を果たしているが、本稿ではその研究成果を援用して、生活綴方教育が戦後の一時期、運動としての興隆を見せた時に編集され、多くの参照がされていた『生活綴方事典』において、生活綴方教育の源流に位置づけられる芦田恵之助の「自己」概念がどのようなものであったかを検討する。中心資料としては、芦田恵之助と友納友次郎との間に行われた「随意選題論争」を据える。それは、本稿の主目的である芦田の「自己」概念を検討することに加えて、それが従前どのような議論の遡上で取り扱われてきたかを明らかにし、かつ、なぜ先述の三者がつながりをもったものとして教育史の中で記されてきたのかについても、その理由を考察したいがためである。

## 2. 随意選題論争における芦田の「自己」

### 2-1 随意選題論争

「随意選題論争」といわれる国語教育論争史を代表する議論が存在する。綴方の教育において「随意選題」を主張する東京高等師範学校附属訓導、芦田恵之助に対して、非「随意選題」、すなわち「課題主義」「練習目的主義」を主張する広島高等師範学校附属訓導、友納友次郎との間で、1921(大正十)年をピークとする論争が行われた。国語教育史に止まらず、日本教育史上に大きな影響を及ぼしたとされる芦田恵之助に関しては多くの研究が為され<sup>94</sup>、芦田自身も多数の著作を残しているが、ここでは本稿の課題に照らして、「随意選題論争」の中でも友納との論争の頂をなす「小倉講演」を中心的資料として扱うことにする。本論争は、作文・綴方教育に関する今日の国語教育を考える視点としても言及されることの多い議論でもあるが<sup>95</sup>、この講演においては、論駁する存在を得た芦田が自身の主張を先鋭的に、また率直に表現していると見られる。本講演は、白鳥三千代によ

って筆記され、『小倉講演 綴り方教授の解決』（1921）にまとめられている<sup>69</sup>。以下、この書にある記述を中心に議論を進めていきたい。

## 2-2 芦田恵之助における「自己」

具体的に、芦田の使用する「自己」という語に関わる言説から、その意味するところを考察していくことにする。

環境は同一でも得来る想は千差万別であるのは、作者の人生観の相違であつて、その想は何人の容喙をも許さぬ絶対的のものである。人の想を模倣した文の如きは、作者の人生観のひらめきと見ることが出来ないから、生きた想とはいはれない。よく模倣より創作へといふ人がありますが、模倣からは決して創作の芽は出ません。模倣には自己がない。自己のない所に、自己独自の創造が生まれるならば、石ころからでも芽が出なければならぬでせう。（同 pp. 52-53）

ここには、綴方教育における「自己」の重要性が語られている。「模倣より創作へ」という、人間の創造的活動における真実を言い表す一面を全否定するかのよう強い物言いをもって、「何人の容喙をも許さぬ絶対的のもの」として、芦田は「自己」を主張する。

さらに芦田は、「満足」という心の充足を語る言葉を使って、次のように述べる。

文章は自己満足が第一義である。他人の満足は第二義で、たとひ他人の不満足なものでも、自分には之を如何ともすることの出来ないものです。以上のことを要約すれば、「文章とは、真剣な態度を以て、作者の人生観のひらめきを、自己の言葉を以て表現したもので、己れを向上進歩せしむるための人間共通の本能に基づいたものである。」といひたいのであります。（同 pp. 55-56）

ここでは、「自己」はそれに対する、時に対立もする「他人」との関係で想定されている。「文章」というものを、「作者の人生観のひらめき」が「自己の言葉」によって表現されたものであると言うのは、前記「模倣」を排した「絶対的のもの」としての「自己」から生まれるものが本当の文章である、という見解と同様の表現と見ることができる。

そこで「随意選題」の意味が、芦田によって次のように語られることになる。

随意選題は文についての体験とその結果とを重んずる唯一の手段であります。更に砕いて言へば、書くべき事を自己の生活内に求めて、自己満足を唯一標準として書くといふことです。それはよくよく考へて見ると、単なる手段方法ではないような気がします。即ちこの随意選題こそは文章を書くという真の境涯である。真の文章生活とはこのやうにして自己生活内に題材を求めて自己に満足の出来るやうに書く、それ以外に何物もありません。故に随意選題とは、生活を文章化することなりとも言ひうると思ひます。(同 pp. 74-75)

随意選題とは「自己満足を唯一標準として書くといふこと」であり、それがゆえに「単なる手段方法」ではなく「真の境涯」となるものである、と芦田は言う。ここに「文章」は、「自己生活」と深くつながり、「生活の文章化」という表現が出現することになる。これらの論述は、本稿のはじめに挙げた、生活綴方を「自己」概念に照らして捉える立場から語られる内容と一致するものである。

次に、「自己」に関わって、綴方教育実践における教師と児童の関係に触れた文言から検討してみたい。

自己の進歩発達に自覚のない者が、他を導いて進歩発達させることは出来ません。文章についてもやはり同じことで、自己が文章を修養して進歩発達した自覚のない人が、児童の文章指導をすることは不可能だといはなければなりません。(同 pp. 139-140)

ここでは、「自己」の修養を為す者こそが「他」を導くという考えが示されている。芦田における「教師-児童」の関係についての基本的な見方が、「自己」概念を介して示されていると考えることができる。そしてこの関係性は、芦田が自身の思想形成に関して言及する文言においても、深いつながりを持つものとして認識されていることが確認される。

私の四十は煩悶期でありました。自分はいかに生きてゐるが、果たして生甲斐のある生活かどうかと疑つたことがありました。その迷つたあげくに縁あつて岡田式静座をやつて見ましたが、はじめは所謂ひやかし静座で、足の痛いことばかりを苦にやんでゐました。ところがあの岡田先生が偉大な人で、「私を信じて、だまつてお座りなさい。」と教へて下さいました。……かくして八年間どうにか座りつゞけて、自己に生きる気分が強くなりました。この静座は黙照禪の行き方と同じで、汝汝を見よといふ主

義です。で、今迄比較的ののみ物を見てみたものが、絶対的に物を見るやうになりました。……自己を外にして宇宙なし、自己究明が何ものよりも大切な一事だと悟るやうになりました。かうした眼があいてくると、今までつまらないものに思つてみた我が教へ児が急に偉いものに見え出しました。彼等の進歩を、驚異の眼を以て見るやうになりました。(同 pp. 143-144)

岡田虎次郎を師として頼み、その静座法によって自身の転機を得ることができた、と芦田は振り返る。「信じて座る」修養によって、芦田は煩悶期を脱したのである。「汝が汝を見ること」、すなわち「比較的に物を見る」ことから「絶対的に物を見る」ことへの転換点に、「自己」の重要性が立ち現れてくる。芦田にとっての「自己」とは、「他との比較でないところにある自己」と見ることができよう。

そして、「自己究明」を大切な一事とみることから、「つまらないものに思つてみた我が教へ児」を芦田は再発見していく。これは、他に支配される児童像ではなく、自ら進歩する児童像を芦田が捉えたことにはかならないが、その基本的な導きは、「修養」を行った教師によってもたらされている。この関係性における構図は、芦田が岡田虎之助によって導かれ、眼を開かれたことと軌を一にして生み出されたものである。

以上、随意選題論争の中で芦田は、「自己」を絶対的なものとして措定し、それは単なる方法に止まらない境涯となることから、文章は自己の生活と深くつながってくること、自己究明は師による修行を経ることによって得られること、そこに教師と生徒の基本的関係性が見出される、という認識を固めたと見られるのである。

### 3. 「随意選題論争」の論じられ方

#### 3-1 「自己」を軸とした把握

これまで芦田における「自己」概念に関わって検討してきたが、次に、芦田一友納の「随意選題論争」について、それが従前どのように示されてきたか、その検討を行いたい。

まず、小倉講演の筆記者である白鳥千代三によっては、芦田における「自己」についての言及が次のように為されている<sup>69</sup>。

芦田氏が此の立場に立つて、随意選題を主張し、自己満足を文の第一義

と言つてをすることは、当然の帰結である。たゞ自己満足といふ言葉は、誤解を招き易く、自分だけよければそれでよいか、独りよがりの文を書いて満足するのかとの非難をうけるのであるが、この自己といふ言葉の中には、偏狭なただひとりの自己でなくて、他人を包含したる自己であつて、自己で満足するものは、やがて他人をも満足するであらうとの予想を含んだものと思ふ。従つて他人が批評し忠告してくれる所はよいことならば喜んで修正することを辞しない自己である筈である。たゞ文が他人のために存在するのではなく、自己自身の向上を第一義とする故に、従つて自己の満足する文を、その場合に於けるよい文とするだけである。(白鳥 1921 p. 242)

「自己満足」という言葉から生ずるであろう誤解を解くべく、それを「偏狭なただひとりの自己」ではないもの、すなわち「他人を包含する自己」である、と白鳥は弁護する。「自己で満足するものは、やがて他人をも満足するであらうとの予想を含む」とされ、他人の批評や忠告を受け入れるものであるはずだ、と考えるのである。

その通りでありたいと思われる論評である。というのは、ここで語られる「自己」と「他人」とが織りなす「予想」からは、一般的な通念としての理想が導かれており、この「自己」と「他人」には両者未分化の様相が漂い、両者の緊張感ある関係性が、白鳥によっては意識されていないように思われるからである。「随意選題論」において芦田に優勢を見た白鳥は、芦田と同様に「自己」を軸とした思考の内にあつたものと考えられる<sup>7)</sup>。

また、白鳥は、芦田・友納両者の共通点を見ようとして、以下の論述を為す。

まづ両者の文章観を比較するに、文章の本義、綴方の真義に於て、殆ど一致してゐることを見出すのである。芦田氏は曰く「文章とは真剣な態度で作者の人生観のひらめきを自分の言葉で表現したものである。而して文を書くといふことは何のためにするかといへば、自己を向上させるためである。表現といふことは、人間共通の欲求に基いたもので、自己満足を以て第一義とすべきである。」と。友納氏は曰く「文章は赤裸々のありのままの表現でなければならぬ。言つても言はなくともよいたゞごとの表現であつてはならぬ。個人の性格が如実に現れたものでなければならぬ。表現の至醇を保つために、発表形式もその用語も各個人の色彩を帯びたもの

でなければならぬ。地方の児童はその地方の言葉で書くのが本当なのだ。理想的にいへば、児童の文は教師と雖も一語の許さない性質のものである。」この両氏の言は、殆ど同じことを別の言葉で言表はしたものである。真剣な態度といふことは、赤裸々、真実ありのまゝと似通ひ、人生観のひらめきとは、たゞごとでない、個性の表現であると言ふ言葉と共通してゐる。芦田氏の自己の言葉を以て、自己の満足する文とは、友納氏の方言尊重と児童の表現そのまゝを重んずる思想と全然軌を一にしてゐる。(白鳥 1921 pp.226-227)

白鳥の見る両者の共通点を語る中心に、前掲の「自己の言葉」があることを確認することができるが、さらにここで重要なのは、その語られる文言として「真剣な態度といふことは、赤裸々、真実ありのまゝと似通ひ」云々の表現が現れていることである。白鳥が先に、鈴木三重吉をこの二大家に並立して挙げていることから、この表現を生活綴方とのつながりにおいて考えた場合、それは、今日的な生活綴方教育受容の問題点として挙げられてくる、「自己を書く」「ありのままに書く」といった表現による生活綴方教育に対する批判的論展開を予想させるものとなる。これは、今日的なそれら批判の大元が「随選題論争」の時点で既に形成されていたことを示すものであり、さらに広げては、「自己」を軸として教育に関する考察を進めていく際の偶然ならざる一致が、時間を超えて現れる事態を見ることができると考えることも可能であろう<sup>66)</sup>。

### 3-2 「主観-客観」を軸にした把握

『実践国語教育』誌の創刊者であり『日本児童文章史』の著者である西原慶一は、綴方教育の実践者であり実践の位置付けを与えた研究者でもあるが、彼は「随意選題・課題主義」の問題を、広く綴方教育界における主観主義と客観主義との対立として見ていた。

大正七年ごろから大正十一年ごろまでつづいた東京高師の芦田恵之助対広島高師の友納友次郎との間における「随意選題・課題主義」問題は綴方界の大きな話題であった。これは単に随意選題のみの意見対立ではなくて、広く綴方教育界における主観主義と客観主義との対立であつたのである。……芦田恵之助は随意選題論を主張した。「綴方は自己を読むことであり、綴方は自己を綴ることである。」という主観主義は信仰的にまで根深いも



のであつた。こうして広島友納、東京の芦田とが、課題 対 随意選  
題 練習目的 対 自由選題主義 客観主義 対 主観主義 で、前  
後五カ年にわたる綴方教育の論争を展開していった。芦田の随意選  
題主義は、……児童本位の主観主義に立つ綴方教育観である。それは、文章そ  
のものを児童らしいものばかりでなく、綴る態度も児童本位化しようとす  
るがねらいであつた。「人」を尊重する態度であつて「技」を排斥する態  
度である。(西原 1952 pp.136-137)

西原は、直接「自己」概念をとりあげてはいないが、「児童本位の主観主義」と  
いう表現から、「自己」の重視を芦田に見ていると解することができよう。また、  
西原の把握において重要なのは、「人」を尊重する態度であつて「技」を排斥す  
る態度である。」という部分である。生活綴方教育の今日的受容の仕方の一つであ  
る「生活、生活という掛け声の下、国語教育としての本義である文章指導を疎か  
にしてしまっている」という指摘<sup>9)</sup>につながる根拠が、この時点で形作られよう  
としている事態を読み取れるからである。

芦田(東京)と友納(広島)を通じて、西原は「課題 対 随意選題」以下、  
いくつかの二項を対置させる鮮明な見方を国語教育に持ち来たった一人とも言え  
よう。西原の言説には、「自己を綴る＝主観主義」という立論によって、それに対  
するところの「客観主義＝技を忘れる」という対立軸が設定されていく思考枠組  
みが見られるが、井上(1975)はその系において、西原の言う「主観主義か客観  
主義か」をはじめ、作文教育上の多くの課題を随意選題論争に見ることができる  
として、次のように記している。

この大正一〇年の随意選題論争は、(芦田の随意選題思想が、他の一般  
の自由選題主義とは異質のものであることを認めるにしても) たんに、綴  
方の題材を教師からの課題によって与えられるか、児童自身をして自由に  
生活の中から発見させるか、という題材選択上の問題だけにとどまらない。  
そこには、当時における作文教育上のあらゆる問題、たとえば、主観主義  
か客観主義か 心理主義か論理主義か 児童中心か教師中心か 綴る態度  
か綴文能力か 人間形成か表現能力か 自由選題か課題中心か 直接経験  
か想像を含むか 細目無用か細目準拠か 教科書無用か教科書有用か 方  
言使用か普通語使用か 創作か練習か などの問題が、集約的に、「随意  
選題」(自由選題主義)と「練習目的」(課題主義)を唱道する者によって

代表され、論争されていたことになる。日本の作文教育が、この「随意選題」問題に象徴される真摯な論争を経験したことがその後の生活綴り方や、「赤い鳥」綴り方などを産んだ作文教育展開の上に果たした活躍はきわめて大きいものがある。(井上 1975 pp.577-578)

西原の述べた「人の尊重：技の排除」には、五番目の「人間形成か表現能力か」を当てることができる。ここに挙げられた多くの課題が、芦田一友納論争に内包されていると見ることは可能であり、それを起点に研究を進めることには一定の意味があるように思われるが、ここここでは本稿の目的に照らして、「随意選題論争」の検討に関わったその論じられ方が、二項の対立軸の措定によって成り立つ議論であることに注目しておきたい。

#### 4. 随意選題論争と小砂丘忠義

##### 4-1 小砂丘忠義による芦田観

前項中、「この「随意選題」問題に象徴される真摯な論争を経験したことがその後の生活綴り方や、「赤い鳥」綴り方などを産んだ作文教育展開の上に果たした活躍はきわめて大きいものがある。」とする指摘は、先に引用した「随意選題思想が、現場の綴り方教授の上に浸透し、やがて昭和初期の生活綴り方として開花していく」という井上の文脈上にあるわけだが、この「昭和初期の生活綴り方」において中心的な役割を果たした人物として、全国雑誌『綴り生活』を舞台に仕事を行った小砂丘忠義を挙げるができる。上記のような作文・綴り方教育史の流れにおける「浸透」や「発展」という見方からすれば、小砂丘は芦田の随意選題思想から影響を受け、就中その中心軸を為す「自己」概念を巡って何らかの継承がそこに存在したと考えるのが妥当であろう。しかし、小倉講演が為されたその年、郷里高知の小学校教員として自身の精力的な教育活動を開始していた小砂丘は、「講習会側面観」(1921)において次の文言を記している。

宣伝される多くの思想が拡がるだけは馬鹿に拡がるが、それ以後に見るべきもの、のないことである。……忌むべきは、それらの主義の各地に拡がるにつれて変種をつくり退化しゆくことである。……適例は今の処比較的年処を多く経たる芦田式の綴り方である。各地で、芦田式の教授が流行し、それ式の文集が作られたに拘わらずその文集なるもの、の杜撰で生氣なく、殆ど見るに堪へるものなきが如きである。(『極北』第3号 1921 所

収)

小砂丘は、芦田の思想を「宣伝される多くの思想」の一つと数え、その推移を見るに「変種をつくり退化しゆく」ものと評している。その結末を「杜撰で生氣なく、殆ど見るに堪へるものなきが如き」と酷評する小砂丘に、随意選題の拡散的な流行を嘆き、あるべき本来の姿、その源流を確認していこうとする様子はない。この事態は、何を意味するのだろうか。小砂丘の考える綴方教育の理解を進めていくと、これまでに見てきた「自己を軸とする把握」、及び「主観－客観を軸とする把握」に代表される二項対立的な枠組みによって、「随意選題から生活綴方教育へ」というつながりを説明することは、かなり難しいように思われるのである。

ここで、『綴方生活』誌主幹、小砂丘忠義が、芦田恵之助をどのように観ていたのかについて確認しておきたい。小砂丘の全ての著作に当たった上でも本件に関する資料を多く集めることはできないのだが、いくつかの芦田観に関する論評が残されている。

小砂丘は「随選題論争」について、それを観察しうる同時代に自身の仕事を興していたわけだが、この件に関する論評は、次のような簡略なものである。

自由選題と課題主義とについては既に論じ悉されていて今頃選題の議論でもあるまいが、私は課題に特異の価値を認めかねる者である。教師がしつかりしてゐる限り、あつて害ありとは思はぬが、なくて不自由なものでは尚更ない。(「村に来て」『教育の世紀』第4巻第1号1926)

ここから伺えるのは、小砂丘は自身の綴方教育を生み出すに当たり、当時の作文・綴方教育における多くの課題を胚胎していたとされる「自由選題－課題主義」に関する問いを、まともに抱えることはなかったようだ、ということである。

先に「講習会側面観」(1921)をあげ、「芦田式綴方」が教育現場にどのように広がっているかに係る評言を示したが、小砂丘によるこの見方は、「綴方の実際を見る－作品に表はれたる現代綴方の功罪」(1929)においても変わっていない。

私が某校の綴方をうけもつた時のこと、三年、四年、五年全部が、毎時間々々々きまつて『昨日の事』といふ題で書いて来たことである。少し効果的に解釈すれば、その頃芦田氏がその地に講習にいつて、毎時間『蛙の子』の綴方を書いて来た子供の云ひ分だとて「先生、昨日の蛙と今日の蛙とは、同じ蛙でもずつとちがつてゐますよ」といふ言葉を引用し、大いに

一法究尽を高潮せられた尻馬にのる連中（の；筆者）置土産だとでもいふべきか、しかもそれが殆どお話にならぬ電報式の文であつたのには少なからず驚かされたことであつた。（『綴方生活』第1巻第2号 1929 所収）

そしてその二年後、「座談会 文話の行方」(1931)に至っては、彼の芦田観は次のようなものになる。『綴方生活』誌上の座談会において、「何しろ抽象の世界で、あれだけの感銘をよびさますのだから、えらい。」という同人、野村芳兵衛の発言に続けて、「抽象に居てのみ芦田の世界があつたのですね。」と、「芦田の世界」を看破する発言を為すのである。（『綴方生活』第3巻第5号 1931 所収）

なぜ小砂丘は、「随意選題論争」や芦田恵之助の綴方に重要性を見出さない、というより、そもそもの興味を示すことがなかったのだろうか。それは、芦田の向かっていく方向とは違う方向、異なる地平を小砂丘が見据えていたからではないか。そこに、芦田が最重要に考えていた「自己」概念とは根本的に違う認識がもたらされており、それは、「自己」概念を軸にする考察や、「自己」という項に対する第二項を措定することからは導き出せないものなのではないか。そういった新たな研究の可能性が現出するのである。

#### 4-2 小砂丘を軸とした研究の方向性

戦前の生活綴方教育に関わる『綴方行動』誌の中心人物で、詩教育に関する論考のある吉田瑞穂は、随意選題論争について、その芦田・友納の両者を止揚する地点を見出そうとしている。

芦田の説は、子どもが、身の傍の事実にもとづいて、書きたいことを自己のうちに発見して自由に書かせるのが主眼だという。そして自己満足のためだという。子どもの作文（創作する）の急所をついたことばであるかもしれない。しかし自己のうちに文題を発見することも（ママ）、対象との関係（外界との関係）を忘れている。なお、芦田は、「綴方教授の解決」で「私は随意選題を綴方教授の本幹であると説きましたが、課題を錬磨の一方として認めたいと思います。」といている。この点、まだ方法的な根拠が明確でない。……つぎに、友納は、課題はやらせるが、自由作もやらせるといっている。そこで、両者の説にはあいまいな点がある。つまり、両者ともに、自分で主張している方法論で不足のところを補うような言説をはいている。一元的になりきっていない。……まとめていうと、個性と

環境に即し、自由に取材させることにも、だいたいのめやすをもち、なお、子どもの生活を培育しながら、そこに取材させていくめやすをもつことを、生活教育の一環として、一元的に考えていって、初めて、芦田・友納の説が止揚される。(吉田 1958 『生活綴方事典』所収 pp.556-557)

この文言は、両者の共通点を見るという白鳥の立場とは違い、それぞれのあいまいさに論及することから、両者をまとめて扱う仕方を提案していると言えるが、筆者としては、芦田が自己満足のために書くと言うときに、「対象との関係(外界との関係)を忘れている。」という吉田の指摘に注目したい。それは、「自己」の外にある「文題」や「対象」といったものを、「自己」との関係において考察しようとするものだからである。

これに近いアプローチは、「『自己のこと』を発想の座軸におく『随意選題』論」(中内 1970 p.89)として、芦田の思想を捉えた中内敏夫によって為されている。中内は、高知時代の小砂丘忠義の文章指導に触れて、芦田との関係を次のように述べる。

その指導過程では、芦田において未分であった主客、物心、そして文章と自我の二界の分離が前提にされている。この二点は、歴史的に先行した芦田系の文章表現指導運動に対する『綴方生活』誌の指導原理の独自性を準備しているものとして、みのがすことのできないだじな点である。(中内 1970 p.339)

吉田と中内に共通する視点は、「自己」と「その外にあるもの」とのいったんの分離である。筆者は、この「その外にあるもの」を「他者」と捉え、「自己-他者」の関係性において小砂丘忠義の研究を進めている。そこには、芦田と小砂丘との違い、「随意選題-赤い鳥-生活綴方教育」という系から一度離れた、現代の教育にも参照しうる生活綴方教育研究の方向性が示されている。

こういった研究の方向性に鑑み、『小倉講演 綴方教授の解決』のほかの文献(「綴り方教授に関する教師の修養」)における「自己」「他者」に関わる芦田の言説の一例をもって、小砂丘との対比を簡便に論述しておく。

教育は被教育者をして修養をたのしむものに仕立てることが肝要である。修養の味を知れば、その者は終生向上し発展して止まぬ。修養に心掛けるものは、一個人としても、社会の一員としても、最も堅実なものである。自己の上に満足を求めるから、他と比較して、羨望し、煩悶し、憤慨

する事はない。……人は左右を相対的に見廻す時に、非常な不満を感じ、自己の上を絶対的にながめる時に非常な満足を感じるものである。(芦田 1915 p.237)

教育者に対する者としての「被教育者」として子供を見ている芦田であるが、そこに「修養」というものをもって「堅実」を任じている。(小砂丘においては、児童は「他者」として立ち現れる。) 芦田によって持ち出される「他」は、「自己」との比較対照のための存在となっている。(小砂丘にとっての「他者」は「自己」と一度切り離された存在である。) また、「相対的」という語は、ここでは「絶対的」なものとして「自己」を押し出すために、両者相反する二項関係において持ち出されている。(小砂丘に見える「相対的自立性」においては、並立する「他者」の中にある「自己」として、「相対」と「絶対」は単に相反する関係にあるものではない。)<sup>(10)</sup>

## 5. おわりに

沖垣寛(1935)『随意選題綴方教育の真髓』の序は、「おゝ、随意選題、お前は既に世の人からその名を忘れられてしまひさうになつてゐたね。」(同 p.1)という芦田恵之助による書き出しに始まり、「お前も私に命名されてから、やがて三十年になる。……最愛の随意選題よ、お前の活躍するのはこれからなのだよ。どうぞ、自愛自重して、幼き者の心に強く生きて、国家隆昌のために力の限り働いてくれよ。」(同 p.2)と続けられる。さらに、「今となったから打明けていふが、私はお前の行末を誰に託しておかうかとひそかに考へていたのだ……誰かそれを見守るものがなくてはと思つてゐた矢先だった。沖垣の叔父さんが半年もかゝつて書いて下さつたこのお書物を見て、一切のことはこの叔父さんに頼まうと決心した。さうして第一にはお前のために喜んだ。第二には我が國の教育のために喜んだ。第三には私のためにも喜んだ。お前もこの叔父さんによく事へて、あつぱれの者に育てよ。さうしてお國のために尽くさねばならぬぞ。」(同 p.4)と記されている。

これを見るに、随意選題というものは、広く教育に携わる人々を動かさうる信念、思想というよりも、非常に個人的な、芦田恵之助の「自己」の掌の中にある、あたかも可愛い我が子にその健やかな成長と活躍を祈るようなものになっている。この言は、芦田の捉えた「自己」を追求することによって得られた、一つの結

果として受け止めなければならないが、それは同時に芦田の教育観の典型でもある、ということが出来るかもしれない。

「自己」を巡る議論が集束していく先が、芦田の上記のような言であるとすれば、それを軸とする「赤い鳥」、そして生活綴方教育も、随意選題に近い命運をたどることになることは容易に想像できる。確認になるが、「自己」の概念を巡って〈随意選題－「赤い鳥」－生活綴方教育〉のつながりを描くことはできるし、実際にその筋において貴重な仕事を為した先人も多い。しかし、こと生活綴方教育の生起においては、「自己に他者がどのように関連してくるか」についてのせめぎ合いがあった事情を、そこに差し挟まなければならない。生活綴方教育前史を考える場合には、「芦田恵之助－鈴木三重吉－小砂丘忠義」という従来描かれてきた系譜に疑問符をつけ、そこに従前の研究で看過されてきた「他者」という要因を噛ませる必要がある。本稿の冒頭に引用した『生活綴方事典』の「はじめに」の文言「多く他人のコトバで、他人の思想・感情をつづらせていたのが、生活綴方運動では自己のコトバで、自己の思想・感情を綴らせるようになりました。」での「自己」は、「自己」の軸に係累しつつ対立する「他人」によって補強される「自己」概念であり、この「他人」は、小砂丘の「自己」との関係性における「他者」概念とは異なるものである。

結果として、「芦田恵之助に生活綴方教育の源流を見る」とする見解には、一定の修正が必要になると考えられる。

## 註

- (1) 生活綴方教育は、運動史としての性格を強く持ち、ある時期のある言説によってその内実が動くという事態が確認される。よってその研究に当たっては、必要に応じて先行論の範囲を学術的な論文の範囲を超えて広く求める必要が生じてくる。本稿ではこの「はじめに」の他にも、同様の扱いをする資料を、この意味で取り扱っている。
- (2) 飯田 (1996)、同 (1999)、同 (2000) など。
- (3) 芦田恵之助の教育史における評価は、例えば次のような研究において示されている。  
芦田の論理は……概念から子どもの「思ひ」を解放しつつあった。教師の目を、外なる制度から子どもの「声」－子どもの「声」を通じて姿を現す非「学校」文化の世界へと移行せしめつつあった。(中内 1970 p.119)  
芦田の随意選題論の特色は、随意選題ということ単に児童に綴り方の題を自由に選ばせるという技術的なことだけでなく、そのようにして書かれる綴り方が児童の人間性の発展に深くかかわるという教育的信念、あるいは教師の生き方として述

べられている点にある。(高森 1979 p.160)

- (4) この議論については、時代を経てもなおその価値が論じられ、意味が問われ続けている。『近代国語教育論大系』の中で、両者の論争を筆記した『小倉講演綴方教育の解決』(白鳥千代三 1921)の「解説」を著している井上敏夫は、芦田、友納両者の言説と、この論争について評する論者の文言を引いた上で、作文・綴方教育史上に随意選題論争を位置付けるといふ視野において、次のように述べている。

このようにして、随意選題思想が、現場の綴り方教授の上に浸透し、やがて昭和初期の生活綴方として開花していくわけであるが、しかし、これによって随意選題論争によって問題となった事項がすべて解決されたというわけではない。……それらはこの後、戦後に及び、学習指導要領時代を迎えるにあたって、再び別の形で問題化されることになるわけである。(井上1975 p.577)

ここには、「はじめに」(『生活綴方事典』1958)で見たものと同様の見方、「随意選題思想」が「昭和初期の生活綴方として開花していく」という、両者のつながりを見る認識の枠組みが呈されている。そして井上は、この論争に胚胎する問題が戦後の新しい時代にも形を変えて継続されている、というのである。

- (5) 本論争と小倉講演について、白鳥千代三は『小倉講演 綴り方教授の解決』のはじめに、次のように紹介をしている。

自由選題か非自由選題か、之はかなり長い間の問題であるにも拘はず、未だ根本的に解決されてゐないやうであります。従つて綴方教授の研究者は、各々その好む所に従つて自説を主張し、互いに壘を高うして論争を続けてゐるやうな傾きがあります。……蘆田友納両氏は、此の両説の代表者として、すでに世に定評があります。今回小倉市教育會の主催、両氏が道を思ふ赤誠から、時を同じうして壇上に立ち、その説の真髓を述べて、世の批評を求めようとする企てが実現されたことは、誠に時宜にかなつたことで、私たちの喜びにたへない所であります。本書は両氏の講演筆記を中心として、その私の批評を添へたものであります。(白鳥 1921 pp. 1-2)

- (6) 白鳥は、次のように芦田と友納の共通点から論評を始めている。

「自己の言葉で表せ。」この大胆な、しかし真実な言葉が我綴方界の二大家によつて叫ばれたということは、鈴木三重吉氏の運動とともに、我綴方界に対する大なる福音といはなければならぬ。(白鳥 1921 p.232)

白鳥は、芦田、友納両者の共通点を「自己の言葉」において捉えているが、このことが、既に同時代の位置付けとして、綴方教育において芦田の横に鈴木三重吉の「赤い鳥」をその系列として並べる評言を為すことにつながっていると見ることができる。

- (7) 高森による次の指摘は、芦田の「自己」に関する白鳥の論評に関して示唆的である。

芦田が随意選題の考え方に自信満々であったことは、かれの反対者である友納友次郎が早くから自分の主張に対して反省的であったことと、きわめて対照的である。芦田は一度主張したことについては、ひたすら補強はしていっても、その本質的な欠陥や作文教育への悪い影響が生じるかもしれないことについては、ついに認



めようとしなかった。……例えば芦田が沖垣寛著『随意選題綴方教育の真髓』の序の中で、……「最愛の随意選題よ、お前の活躍するのはこれからのだよ。」と言っていることと、友納が昭和三年に『将来の綴方教育』の中で「実際のところ私なども当時伝統のそれと戦ふことのみ汲々として、大切な根本問題に手を着ける余裕がなかった。」と言っていることを比べれば歴然とする。(高森 1979 p. 161)

この評価は、ここに挙げた白鳥の、芦田の「自己満足」という語から来る誤解を解きたいとして弁護した主張とは、正反対の評価となっていると言える。

- (8) 例えば、「[思った通りに書け][あるがままに書け]と命じられ、筆でサラサラ書くというのは、漫画に出てくる戯画化された文豪みたいに山のような紙クズを出さない限り、ちょっと無理な相談である。」(斎藤 2002 p. 175) など。なお斎藤は、「芦田以降、戦前の作文(綴り方)教育界の流れは、「赤い鳥綴り方」から「生活綴り方」へと、表現意欲をのぼす方向へ傾斜した……」と、「芦田ー赤い鳥ー生活綴方」を一本の系で結ぶ認識をもとに記述を進めている。(斎藤 2002 p. 196)
- (9) 例えば、小砂丘忠義の「教育の煙幕的效果」(『綴方生活』1931. 3)を評した渋谷の評言「ここには、この児童の文章を添削する観点がほとんど無い。……」(「作文による人間形成指導の無惨の一事例」渋谷 2001) など。なお、渋谷はこのあと「小砂丘の提唱した立場は「ある少数の支配者の掠奪」と「下積みになった被支配者」を図式的な対立で捉える明快で単調な被害者史観である。」と続け、この論文における小砂丘の複雑な思考展開を、二項対立的な見方によって整理を図っている。
- (10) 筆者は、本研究の基礎概念に当たる「自己」「他者」に関する考察、及びその概念構成によって、「小砂丘綴方教育の構造」を描くことを試みている(飯田 2000)。ここでは、小砂丘における「自己」とは、一度明確に「他者」から分離されたものであること、さらに、その「自己」は「他者」を前にして十全に開いている状態であることが確認された。そして、この「他者の受容」によって、小砂丘の重視する「動く」という事態を取り込み、「新しき自己の意識に生きる」ことを目指すものとして、その綴方教育の構造を以下のようなものとして描いている。それは、〈「自己」と「他者」を一度「分離」する。：「自己」は「分離」された「他者」を受容する。：「受容」の際、「動く」ことが「自己」の側に生じる。：「動く」ことによって、「自己」は「新しい自己」となり、「創造」が生まれる。〉というものである。

次いで、この綴方教育の構造が内包する思想として「相対的自立性」というエートスを抽出したが、小砂丘忠義の教育思想には他にも、「物の正体を見極めること＝眼に見えぬ物へのまなざし」、「教育における大衆的メロクラシー構造の看破」、「言語における他者性の指摘」、「教育における予定調和、一貫性に関する批判的議論」といった、今日の教育を考察する上でも参照されるべき、多くの見方が内包されていると考えている(飯田2009a 2009b)。

## 引用・参考文献

- ・ 芦田恵之助 (1915)「綴り方教授に関する教師の修養」育英書院

- ・飯田和明（1996）「小砂丘忠義の綴方教育，その基底」『人文科教育研究』第23号 人文科教育学会
- ・飯田和明（1999）「小砂丘忠義におけるプロレタリア教育の影響と「表現技術」指導」『日本語と日本文学』第29号 筑波大学国語国文学会
- ・飯田和明（2000）「小砂丘忠義の綴方教育，その構造—「自己」「他者」概念の検討を中心に—」『国語科教育』第47集 全国大学国語教育学会
- ・飯田和明（2003）「小砂丘忠義の綴方教育，その「教育の事実」」『日本語と日本文学』第37号 筑波大学国語国文学会
- ・飯田和明（2004）「初期生活綴方教育の実際—小砂丘忠義の文章指導を例として—」『筑波教育学研究』第2号 筑波大学教育学会
- ・飯田和明（2009a）「小砂丘忠義の綴方教育，その思想」『読書科学』通巻第201・202号 日本読書学会
- ・飯田和明（2009b）「1930年代論と『綴方生活』」『日本語と日本文学』第49号 筑波大学日本語日本文学会
- ・井上敏夫（1975）「解説 小倉講演綴方教授の解決」『近代国語教育論大系6 大正期Ⅲ』光村図書 所収
- ・沖垣寛（1935）『随意選題綴方教育の真髓』同志同行社
- ・川口半平（1958）『作文教育変遷史』岐阜県国語教育研究会
- ・久木幸夫（1980）「随意選題論争」『日本教育論争史録』第二巻 近代編（下）所収
- ・桑原哲朗（2004）『芦田恵之助の綴り方教師修養論に関する研究』漢水社
- ・斎藤美奈子（2002）『文章読本さん江』筑摩書房
- ・佐々井秀緒（1981）『生活綴方生成史』あゆみ出版
- ・小砂丘忠義（1921）「講習会側面観」『極北』第三号 所収
- ・小砂丘忠義（1926）「村に来て」『教育の世紀』第4巻第1号 所収
- ・小砂丘忠義（1929）「綴方の実際を見る—作品に表はれたる現代綴方の功罪」『綴方生活』第1巻第2号 所収
- ・小砂丘忠義（1931）「教育の煙幕的效果」『綴方生活』第3巻第4号 所収
- ・小砂丘忠義（1931）「座談会 文話の行方」『綴方生活』第3巻第5号 所収
- ・渋谷孝（2001）「作文による人間形成指導の無惨の一事例」『教育科学国語教育』No. 602 明治図書 所収
- ・白鳥千代三（1921）『小倉講演 綴方教授の解決』目黒書店
- ・高森邦明（1979）『近代国語教育史』鳩の森書房
- ・中内敏夫（1970）『生活綴方成立史研究』明治図書
- ・西原慶一（1952）『児童文章史』東海出版社
- ・日本作文の会（1958）『生活綴方事典』明治図書
- ・波多野完治（1975）『国語教育著作集』明治図書
- ・飛田多喜雄（1965）『国語教育方法論史』明治図書
- ・吉田瑞穂（1958）「随意選題か，課題か」『生活綴方事典』明治図書 所収

A Study of Events connected with SEIKATSU TSUZURIKATA KYOUIKU  
("Composition Based on Daily Life") :  
The Concept of "Self" in ZUISENDAI ("Free Selection of A Theme  
on Writing Education") by ASHIDA ENOSUKE

Kazuaki IIDA

The concept of "Self" is said to be an essential matter in ZUISENDAI ("Free Selection of A Theme on Writing Education") advocated by ASHIDA ENOSUKE. This concept is also said to be an important matter in SEIKATSU TSUZURIKATA ("Composition Based on Daily Life"). However, SASAOKA TADAYOSHI who is referred to as the father of SEIKATSU TSUZURIKATA KYOUIKU does not delve very much into a discussion of ZUISENDAI. Therefore, it is difficult to relate SASAOKA with ASHIDA in one series of ideas. The purpose of this study is to examine the concept of "Self" related to ZUISENDAI proposed by ASHIDA ENOSUKE. The main material for this study is ZUISENDAI RONSOU. This argument was made by ASHIDA ENOSUKE and TOMONOU TOMOJIROU, in contrast to ASHIDA who stressed his "Setting a Theme on Writing Education." We also examine the method for discussing ZUISENDAI RONSOU according to the concept of "Self" in previous studies. Results show that the way of interpreting a subject is to center on the "Self," or center on binomial opposites such as "Subject-Object." We should clarify that what is important in the study of TSUZURIKATA KYOUIKU is to examine those materials using the framework of "Self in connection with Others." This is the most important idea in the examination of SASAOKA's TSUZURIKATA KYOUIKU, which has not been of focus so far. In the context of SASAOKA, "Others" does not mean the concept of "Others to reinforce Self," or "Others as binomial opposites of Self." These results lead us to the conclusion that it is necessary to modify the view that ASHIDA ENOSUKE is behind the origin of SEIKATSU TSUZURIKATA KYOUIKU to a certain extent.